特　集

精神看護学実習における携帯型タブレットを用いた遠隔での実習カンファレンスについての一考察

原田　真澄　　飯田　大輔　　山本　壮則

日本赤十字豊田看護大学紀要 19 巻 1 号，93−97，2024

特　集

精神看護学実習における携帯型タブレットを用いた遠隔での実習カンファレンスについての一考察

原田　真澄[1]　飯田　大輔[1]　山本　壮則[1]

Ⅰ　はじめに

2020 年の新型コロナウイルスの感染拡大以降、多くの看護師等養成所では看護学実習の中止又は縮小という事態を経験した。本学においても、シミュレータ等を用いて技術修得に力を注ぐことや、インターネットのビデオ会議システムを用いて実習施設と大学の間をつなぎ、臨地にいる実習生と学内実習を行っている実習生が協力して看護過程を展開する取り組みが行われた（小林，清水，橋本，2023）。

精神看護学領域では、大学として取り組むウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業のひとつとして、携帯型タブレットを用いた遠隔実習指導に取り組んだ。携帯型タブレットを用いた遠隔での実習カンファレンスを取り入れることで、実習指導を行う常駐教員が 1 名の実習施設においても、他教員がオンラインで実習カンファレンスに参加することで、学生へのシームレスでタイムリーな実習指導を行うことができるため、臨地実習の教育効果を高めることにつながると考えた。

本研究は、精神看護学実習において携帯型タブレットを用いた遠隔での実習カンファレンスの効果を明らかにすることを目的に取り組んだ実践報告である。

Ⅱ　精神看護学実習の実際

1．精神看護学実習の概要

精神看護学実習は 2 単位 90 時間で、精神科病院の病棟での実習を中心に展開している。各病院の学生受け入れ人数は、6 名～ 12 名、病棟の学生受け入れ人数は 3 名～ 6 名と、実習施設や病棟の特徴によりさまざまである。

実習目的、実習目標は以下の通りである。

［実習目的］

精神に障がいをもつ人とその家族にとっての病の体験の意味を理解した上で、治療的関係を形成し、その過程を考察することで自己洞察を深める。また、対象者の精神的健康課題を把握し、その課題への対応を意図した個別的な看護を実践する基礎的能力を養う。

［実習目標］

① 精神に障がいをもつ人とその家族の病の体験の意味を理解し、対象者の精神的健康課題を把握できる。
② 精神に障がいをもつ人のストレングスを活用し、対象者の精神的健康課題への対応を意図した個別的な看護を実践することができる。
③ 精神に障がいをもつ人との関わりを通して治療的関係を形成し、その過程を通して自己洞察を深めることができる。
④ 精神科病院を含む地域で行われているリハビリテーションを意図した援助について理解し、精神に障がいをもつ人の社会参加のあり方を考えることができる。
⑤ 精神看護における倫理について理解し、精神に障がいをもつ人の安全・人権擁護を目指した援助を考えることができる。

2．従来の精神看護学実習の指導体制

教員の実習指導の体制は、学生受け入れ人数を基に、実習指導を行う常駐教員が 1 名の場合と、実習指導を行う常駐教員が 2 名の場合がある。実習指導を行う常駐教員が 1 名の場合、指導的立場の教員は、病棟実習初日と中間カンファレンスもしくは最終カンファレンスには臨地で実習指導を行うようにしている。ま

[1] 日本赤十字豊田看護大学　精神看護学領域

た、実習指導を行う常駐教員が 2 名の場合、2 名のうち指導的立場にある教員は、担当する病棟の実習指導を行いながら、教員間で学生の実習状況を共有し合い、必要に応じて横断的に実習指導を行っている。そして中間カンファレンスと最終カンファレンスには常駐教員 2 名が必ず参加し、実習の進捗状況に応じた指導・助言を行っている（小林，清水，橋本，2023）。

3. 実習カンファレンス

実習カンファレンスには、病棟カンファレンス（一日のまとめのカンファレンス）、中間カンファレンス、最終カンファレンスがある。病棟カンファレンスは、原則として毎日 30 分間開催し、その日に学んだことや気づいたことの情報交換を行い、翌日の実習に必要な助言を得ることを目的としている。中間カンファレンスは、受け持ち患者の統合アセスメントの内容を発表し、看護の方向性を明確にすることを目的に、実習 1 週目の木曜日に開催している。最終カンファレンスは、学生個人の実習目標の達成度と精神看護学実習を通しての学びを発表しており、実習 2 週目の木曜日に開催している。

Ⅲ　研究方法

1. 対象者

対象者は、2022 年度後期から 2023 年度前期にかけて精神看護学実習を行った本学学生である。

2. 調査期間

調査期間：2022 年 10 月～ 2023 年 7 月

3. 調査方法

本研究では、実習指導を行う常駐教員が 1 名の実習施設で実習を行う学生、つまり遠隔での実習カンファレンスを行う学生を A 群（以下 A 群とする）、実習指導を行う常駐教員が 2 名の実習施設で実習を行う学生、つまり対面での実習カンファレンスを行う学生を B 群（以下 B 群とする）とした。2 群の内、A 群の実習カンファレンスは、実習指導を行う常駐教員 1 名と携帯型タブレットを用いて Web 会議システム（Zoom）を活用し遠隔で参加する教員 1 名の参加のもとで行う。B 群の実習カンファレンスは、実習指導を行う常駐教員 2 名の参加のもとで行う。

対象学生には、精神看護学実習の初日（学内実習）に、研究への協力のお願いの文書を配布し、研究内容の説明を行った。その際、研究への参加は任意であること、実習評価や成績には一切関係がないこと、調査は Forms を活用し、無記名方式で行い、回答をもって研究参加への同意が得られたとみなすこと等を説明した。

A 群の遠隔での実習カンファレンスおよび B 群の対面での実習カンファレンスは、精神看護学実習 2 週目の火曜日もしくは水曜日とした。実習カンファレンスの実施日時を実習 2 週目に設定した理由は、実習 2 週目のカンファレンスのテーマが、受け持ち患者のケアプランや実践に関する内容になることが多く、実習グループ間でテーマにばらつきがみられないためである。

対象学生には、実習カンファレンスの調査日の実習終了後、Forms の URL を送信し協力のお願いをした。

4. 調査内容

調査内容は、実習カンファレンスの効果に関して、先行研究（杉森，1999；早瀬，木下，田尻，2021）および、本学の精神看護学実習のカンファレンスの目的を参考に作成した。各項目の回答肢は、「そう思う」、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全く思わない」の 4 件法とし、自由記載の項目を設けた。学生 A 群の項目数は携帯型タブレットに関する 2 項目を含む 10 項目、学生 B 群の項目数は 8 項目とした（表 1）。

5. 分析方法

統計分析は、統計ソフト IBM SPSS Statistics を用い、記述統計、マン・ホイットニーの U 検定を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字豊田看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号 2227 号）。

実習施設に対して、遠隔実習指導の取り組みの概要、実施方法などについて説明した。4 施設のうち 3 施設から了承を得られた。許可が得られた実習施設のうち 1 施設からは、施設内の研究倫理審査委員会への申請を求められたため、当該施設の研究倫理審査委員会の承認を受けた後に、遠隔での実習カンファレンスを行った。

表 1　実習カンファレンスの効果　質問項目

No.	質問項目
1	カンファレンスにより実習の方向性を明確にすることができる
2	カンファレンスにより実習の学びを深めることができる
3	カンファレンスにより自己理解を深めることができる
4	カンファレンスによりグループの相互作用を理解することができる
5	カンファレンスによりグループメンバーの信頼関係を強め、グループとしての凝集性を高めることができる
6	カンファレンスにより実践した内容を意味づけることができる
7	カンファレンスによりテーマを多角的な視点から検討することができる
8*	携帯型タブレットが気になる
9*	携帯型タブレットからの音声が聞こえづらかったり停止することがあった
10	自由記載 実習カンファレンスの効果について、気づいたことなどありましたら具体的に記入してください。

※回答肢：No. 1 - 9 の回答肢は、「そう思う」4、「まあまあそう思う」3、「あまりそう思わない」2、「全く思わない」1　である。
※No. 8 - 9（＊項目）は、遠隔でのカンファレンスを行う学生群のみの質問項目である。

対象学生には、文書により調査への協力は、自由意思によるものであり、回答の有無は、臨地実習の評価や成績には一切関係なく、調査に協力しない場合でも不利益を被ることはないことを説明した。また、調査は Forms を活用し、学生のメールアドレスや氏名などがわからない無記名の設定で行うため、研究者（教員）と学生の直接のやり取りはないこと、調査に係る所要時間は、5 分程度であり、過度の負担になることはないことを説明した。但し、無記名方式のため、回答を送信後は撤回することはできないことをあらかじめ説明した。

Ⅳ　研究結果

調査の対象者は、A 群 19 名、B 群 21 名であった。A 群は 19 名のうち 14 名（回答率 89.5%）から回答が得られ、B 群は 21 名のうち 17 名（回答率 81.0%）から回答が得られた。

1．実習カンファレンスの効果の比較（表 2）

1）調査項目の結果

A 群は、質問項目 No.2、No.4、No.5 について全員が「そう思う」と回答していた。その他の項目についても平均値 3.5 以上であった。また A 群のみの質問項目 No.8（携帯タブレットが気になる）は平均値 1.79、No.9（携帯タブレットからの音声が聞こえづらかったり停止することがあった）は平均値 1.07 であった。

B 群は、全ての項目で平均値 3.5 以上であった。

表 2　実習カンファレンスの効果　2 群間の比較

質問項目	A群：遠隔（n=14）		B群：対面（n=17）		
No.	Mean	SD	Mean	SD	*p-value*
Q1	3.86	0.35	3.88	0.32	0.838
Q2	4.00	0.00	3.94	0.24	0.364
Q3	3.93	0.26	3.76	0.42	0.225
Q4	4.00	0.00	3.71	0.57	0.056
Q5	4.00	0.00	3.76	0.42	0.056
Q6	3.79	0.41	3.82	0.38	0.794
Q7	3.93	0.26	3.76	0.42	0.225
Q8	1.79	0.77			
Q9	1.07	0.26			

2）2 群間の比較

質問項目 No.1-7 についてマン・ホイットニーの U 検定を用いて 2 群間の比較を行った結果、有意な差はみられなかった。

2．実習カンファレンスの効果についての自由記載（表 3）

実習カンファレンスの効果についての自由記載は、A 群 2 名、B 群 5 名から回答が得られた。A 群の回答のひとつは、「遠隔カンファレンスの教員は資料を持っていないため、どこまで説明すればよいか迷った」という内容であった。その他、「カンファレンスで看護計画や患者との関わり方等の悩みを共有するこ

表 3　実習カンファレンスの効果　自由記載

A群（遠隔）	遠隔のため、先生に資料が渡されていないのでどこまで説明する必要があったか迷った。
	カンファレンスで看護計画や患者との関わり方等の悩みを共有することで、実習に対しての不安を軽減することができる。
B群（対面）	自身の言葉を改めて言語にすることで気づけることがあると思う。
	自分が良いと思っていることについても、他者の視点から見ると不足していることも多いと思うのでそこに気付けることが良いと思う。
	自分には無い視点を他の人の意見から学ぶことが出来るためその日の学びを深め、次からの実習に活かすことが出来ると感じている。
	1人で悩まず、皆に相談できる場となり助かる。
	意見交換により、自分にはない新たな視点からの考え方を知ることができるため、多角的な視点を養うことができると思った。

とで不安を軽減出来る」、「自分にはない視点を他の人の意見から学ぶことが出来、学びを深め次からの実習に活かすことが出来ると感じる」、「意見交換により多角的な視点を養うことが出来ると思った」など実習カンファレンスについて肯定的な内容であった。

Ⅴ　考察

本研究では、精神看護学実習において携帯型タブレットを用いた遠隔での実習カンファレンスの効果を明らかにすることを目的に、2 群間の比較を行った。今回の結果では、2 群間に有意な差はみられなかったことから、実習カンファレンスの方法は違っても同じような効果が得られる可能性があると考える。

実際に遠隔カンファレンスを実施してみると、学生は携帯型タブレットを用いて遠隔カンファレンスを行うことを抵抗なく受け入れている様子がみられた。このような状況が、A 群のみの質問項目 No.8-9 の平均値の低さにあらわれていると考える。

また、学生は複数の教員から指導・助言を得ることで、自分では気付かなかった視点で患者との関わりを捉えることができ、患者理解の深まりにつながった場面がみられた。オンラインで行う精神看護学実習のカンファレンス場面を想定した事例検討の学びとして、【異なる価値観を認識し効果的な支援につなぐ】、【他者と相談、協力をすることで見つかる解決策】等が報告されている（近藤，遠藤，長澤他，2021）。本研究における実習カンファレンスの効果の自由記載をみると、悩みの共有、不安の軽減、言語化による気づき、多角的な視点からの学びなどが挙がっており、先行研究の結果との共通点がみられた。また学生はそれらの学びを次の実習に活かすことができると記載しており、学生の主体的な取り組みが伺える内容であった。自由記載の回答数が少なく 2 群間の記載内容の比較は難しいが、実習カンファレンスの方法の違いがあっても同じような効果が得られる可能性はあると考える。

Ⅵ　おわりに

新型コロナウイルス感染の影響により、実習施設及び実習期間の変更が生じ、臨地実習自体の継続が困難な状況を経験したが、臨地実習が可能な場合は、遠隔による実習カンファレンスの実施に継続して取り組んだ。

今回、実習カンファレンスの効果について、遠隔でのカンファレンスと対面でのカンファレンスには同じような効果が得られる可能性が示唆された。

臨地実習指導者には事前に説明し了承を得ていたこともあり、遠隔でのカンファレンスの受け入れは概ね良好であった。しかし、実習病棟の状況により、実習カンファレンスの開催時間や場所が急遽変更になる場合があり、変更に関する情報を教員間でタイムリーに共有することが難しい場合があった。また大学から遠隔カンファレンスに参加している教員の発言の聞き取りは問題なかったが、学生の発言は、携帯型タブレットの位置や学生の声の大きさなどから聞き取りにくい場合があり、大学から遠隔カンファレンスに参加している教員がコメントのしにくさを感じることもあったため、今後集音マイクの活用などの検討が必要である。

遠隔で実習カンファレンスに参加する場合、学生の特性や実習の進捗状況を教員間で共有しておくことで個々の学生に応じた実習指導が可能になり、実習カンファレンスの効果につながると考える。今後、教員間の情報共有の方法を検討することが課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、遠隔での実習カンファレンスにご理解ご協力いただいた実習施設の関係者の皆さま、対象の学生の皆さまに深謝いたします。

文献

早瀬麻子，木下純子，田尻后子（2021）．オンラインでの母性看護学実習における学習効果．佛教大学保健医療技術学部論集，第 15 号，29-44.

小林尚司，清水みどり，橋本亜弓（2023）．携帯型タブレットを用いた遠隔実習指導の実際．日本赤十字豊田看護大学紀要，18（1），23-27.

近藤美保，遠藤りら，長澤利枝，篁宗一（2021）．オンラインで行う精神看護学実習の事例検討による効果評価．精神科看護，48（8），62-70.

杉森みど里・舟島なをみ（2021）．看護教育学 第 7 版．医学書院.